



吾
榘
集
乳

5
5611
1



門へB
號5611
卷 1



花はさきも色も風流さきさき逢ふも
馬の末末の隈もよもほれ志にくを待
のふもあつたふりつらあつたのまじりあ
かきかきあつたふりつらあつたのまじりあ
かきかきあつたふりつらあつたのまじりあ
かきかきあつたふりつらあつたのまじりあ
かきかきあつたふりつらあつたのまじりあ

方は戸部麻布の土也。其の産地は
申す。一、戸部麻布の産地は遠く
わさねる。二、戸部麻布の産地は
わさねる。三、戸部麻布の産地は
の産地は。四、戸部麻布の産地は
一、戸部麻布の産地は。二、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。三、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。四、戸部麻布の産地は

戸部麻布の産地は。一、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。二、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。三、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。四、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。五、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。六、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。七、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。八、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。九、戸部麻布の産地は
戸部麻布の産地は。十、戸部麻布の産地は

あはれに古くはなれはるる白梅一輪舟に舟の
そとに文ありてはるるかたの梅子其
まのしるはるるあはれはるるのしるはるる
後集も清はるるのしるはるる中も其後
治すかたの道はるるのしるはるるのしるはるる
あはれはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
心ありてはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる

清はるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
あはれはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
のしるはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
文のしるはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
のしるはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
あはれはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
あはれはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる
あはれはるるのしるはるるのしるはるるのしるはるる

時を合々のけをさくし茶振舞

茶前

新藤ふあがぬ梅下

園二

月色を系あふ木の残さゆ

四山子

花あけ乃唐お啼も新

そのめ

任副を流も隣りぬふ里千

共前

作のふり習多実一神

柳年

裁縫乃物古のを話さうん果

後巻

夏のうちをゆ免おせんさく

赤妻

友をさき森お散りの赤やろ

酒一

縮着付り〜言乃あらく

千菊

所中の川りあふあは澄色出

炊菓

花を来てわ野子ふ味噴挿

月雪

祝ひ日も月の意をハ高き色あ

如息子

秋〜う聲乃初〜唐春

角羽

世道作ふ跡意の初直お秋出

塊貝

大とわ之と雪分のちま

栲水

暖簾子初々々 世の病々々 亀風子

海苔を並魚 荒砂の上 月窓

舟内子波めを呉 五加木飯 錦枝め

田の俵お初々々 壺口

歩はり乃迄 糸之紙福歩行 怡々

掃時をり 掃々半都 榮遊

志々々 雪もはらぐ 雪作 純丸

ま々々 又かき 船の病々 乙雅

海行末々 盤詰々々 幕 冬吟

三井の小姓乃々 氷秀め

的々々 推乃木末の 柳巴め

隣々々 橋糖々 梔堂

涼々々 糸波も 宣頂

人子 夢々々 芥 芥堂

廿日 月 微雨 竹 竹烟

畔 乃 換々々 琴舎

刺髪を包んて紙のやきま
運待

栲栳カカミ
栲堂

唯下り芍薬扇多きや
百和

めりカカミ
白次

鳥籠の母の仰り紙推計り
天弓

彼岸アキ
里島

花咲と花めとアキ
雀籠

振と醒老の子かアキ
朱危

明高と本家カカミ
蓮菱

羞の版アキ
葉糸

時高と仲カカミ
蕙塔

きゆくアキ
野堂

組割の舞オシ
台

道めオシ
二栗

級滑の初オシ
膳箱

随筆ハサシ
竹山

正直、とうゆをうりの下男

秋翠女

此走、つぎハ約き、踊場

雪毛

酒を、手拭き、く、新法、有

沢井

舟の、番乃、き、良引、つ

サカミ 親堂

恒、う、ハ、澄の、水、ぬ、ぬ、う、う、通

関山

由、え、ハ、乃、曇、を、又、も、存、る

南懐

面、夜、を、鏡、也、す、ヤ、を、奪、も、行、た

花陰

布、袋、身、を、去、る、ぬ、福、の、身

穀車

瀬戸、焼の、洞、の、松、子、鹿、る、ん

上も 無名

山、え、も、踏、く、編、り、の、牛

一多

月、の、お、と、く、く、指、乃、折、り、や、り

永之

草、も、也、ハ、學、集、と、字、以、り

諸君

又、と、鹿、神、田、多、く、乃、皆、折、く

ユキコ 巫山

と、ま、也、の、針、を、ま、る、り、肉、職

サカミ 蒼名

今、一、川、百、く、く、馬、く、ぬ、親、持、多、く

元洲

積、産、海、と、橋、の、く、ハ、結

子龍

郭公路と啼け 青天より サカミ 花山

くちく 脚底の速おこる むら

長竹の縫乃由いと明うる 東川

ちと子のけうぬ 春 一巻 芦丈

内浪を交代あの子をゆけ 幸條

我作画をえり難魚高市智 サツマ在平下 怪く

まあくと水煙のくさじゆ 早梅め

新くもきく 猿けを来 宝山

水坂いむうーやうの月と花 表雀子

あしめを香乃忌言を吹 若海

平生うやうい難所買上手 カカミ 舟堂

道後へ泥の隣り前乃 呉丁

下座を巻と巻く 素明

あふり海に飯万盛やう 竹匠

氣通しと換し福を立まゆ 泉介

生木の燭を一寸能消す 万里

伊豫之居を凍るも産物産の中 竹堂

三里の外ハ冬乃流あり イ十八 佛兄

寮司より分所あり 在の者 子三十一 若村

横井戸堰と鴨籠入並 白川 仙孫

道同ハ火縄も去りし町邊を ともあ

野村抄々銀乃々々々々々 未成

植地より一町と白木の出来のとき 未成

菱柄作る丸を積 月 呂叟

凡実と根掘の藤を繋ぐ 梧吉 命三

入るよりと去る藤のつら打 秀一

靴鞋を襦手袴と懸並へ 英父丸

雲ち〜ひ〜流石 噴 鯨六

去るもや〜大勢送る首途平 鯨六

石村 藤の出来栄々々々 不一

振竹く岩中の産乃花也々々 逸翁

新より〜ふくき如月 若 西三

滿尾

各一句

捻香

夫巨

紅桃玉梅 有開謝之前後

黃鸝玄鳥 有出沒之始終

動物植物如此 生界器界維同

粵新園寂桐樹院自然鳳朗居士

俳諧達者 中興之器

嚴命一下 國華日豐

閑目 雖爾

閉目默然 煖息斷絶

是故

暫用一鑊頭下 實現金剛地輪

休矣幽儀

六根清淨 快活自在 一心一念

遊化神通 即心是佛 頓證大悟

昔弘化二乙巳年十一月二十八日

大僧都法印隆海敬白

追悼

如〜〜云々も如地可親 如息子

其〜日也袖も〜〜手も〜〜 錦枝女

〜〜を〜〜〜〜小初〜 春雀子

〜〜何も〜〜〜〜 春縁子

〜〜の〜〜日の入〜〜〜〜 竜風子

老阿の病床に侍りて肩おと
さきりては腰より下のゆゑに
切ては寝るにまじりて暖めんと
せしむるに河をたててひた
るもやいりてお師打らるる
ゆふよあつてもつても是は皆
体借る吾徳もつらむを
土と坤と持と告めしむる
身居るのさうり

きりて 希世をさるるにわりの部

風を

秋を温床の竹枯葉微笑といふ
まをさるる

きりて今貴をさるる乃 師の嘆

風二

他のもつて 立ち居るも 氷の存

崔翁

雪霰の名も 埋まぬ 心う里う角

台く

老師を侍

北の雪に木枯と ちりて 雪霰雲

風拂

三七日 將前

あつても 雪のむらふ 年の雪

逸洲

初月忌

標くらを 梅もつらむ ちりて

永久

師の教をうけしむるに二十余年と
之をも夢の如くせば通うては悲し
むに如くや夏の如く幻の如く

あつちを我を誰かふや雲の聲

上毛 竹烟

ゆらゆらのうきも秋くも柿の乳

橋水

終焉の夜

流抱の胸のうきも柿の乳

橋水

ゆらゆらのうきも柿の乳

桑葉

あつちを我を誰かふや雲の聲

角羽

軍馬や船馬のまゝに流るるを

怡々

空をよこし舟乃を舟よ墓より

月窓

晴るる一向に流るる舟

樹身

雪折もそよ風をきき舟乃を舟

雲鳥

其夜一箇の通船の如く

湯の聲をきき舟乃を舟

櫓具

月雪や舟のまゝに流るる舟

種丸

ゆらゆらのうきも柿の乳

竹屋

師の病癒とこれく打集り
 歎息とて中々如く是れ不
 の位に何れかひりて如く
 を新せきしとて経集
 ともゆきとて

北へも其の酒をく 雲らへら
 酒果て酒をく 楳能思へり
 物うもく其れを牡丹皮とて
 清くくと小をく 桐花影は河
 佛はるくくのらへり 枯尾葉
 香一

春の河を尋ねのあへり 遠くを
 枯ら後何れもちを柳 一角
 月の中加至裸とて啼ふと
 云とれとれかかちる 可那
 捨さる埋まらる ふうり
 雪の道たへ一をちる 新をく
 おのりて念佛の出る 雲根を
 曇を扱ふ扱ふ曇とて 雲念佛
 乙雅
 琴舎
 壺七
 名吟
 若海
 霞雲
 雅山
 雲連

南中層系おちあふも流しむの事 英父丸

春さうし 耳に松のの子有り車 ユル 豊彦

幻やあらしし尺をておれりあり 和歌女

柳空やむぢしし清き土乃色 柳起

子有けり流あし波と来しりる 柳枝

橋の空にさけりてあふハ手な 三星

をし晴もふらむ雨乃日暮る角 知益

悲しきけりけり名のや空の松 大羽

ちあしき雲さうしし是 未成

冬ふ日のさけりや手極ぬけり松 野巻

をしすれり流あし松の雪 渚尾

手向ふもさうししよ乃極 尾山女

雪風の吹けりさうし今宵う南 雨菰

問ももぢし流の流るの 鯨六

冬山山嶺さうしもぢるさう 暖路

八月十一座流るむさうし 下八里喬

宵ふり起を啼く子鳥可南 サカミ 晏了

家より出ず顔 イナヒコ 仙兄

尋常の梅も明も尾未 ニサシ 梨蔵

峯より雪の餅を摘りてとてはハ
さうあつちうあふを喰て

耳く考す張合も 小豆餅 柳巴め

予ふ若し一は一大事しとて
帰るの後 謂 前よりさか

辛梅や月の末子ぬ 深地

侍の駒と 竹堂

まきくと明も 塚のあ 沢井

新けきかさねの橋 天了

海よりいぬ 亀丸

眼の先 そのめ

加 仙孫

素明

字郎

文車め

空の〜花の〜は眼も知らぬ 百和

浅きや 措乃 空も水乃音 秋葉世

風転て相お林乃 志々 籠り糸 天王寺 不來

大相や 葉さうと ちうー 考の 臨 三巴

そえおええとーとー 別案 清林

帝ーの 昔や 是て ちう 又 河之 南溪

柳の 折て 力の ぬけ 了 度 可 南 里遊

又 志と 乃 ちう 柳の木 乃 白く 素 早梅ぬ

春 香て 貴香を ちう む 夕 可 秘 萱路ぬ

清く 告て 願わ ちう 世一 坤 一 安阿

墨子とぬらきと筆あり月影を透す
柳葉の海ををり 倉海行舟

身と 解さ 赤乃 帝や 塚の 前 新里

志の 前と 柳の下 清く 多利 梧青

花乃 香も 加さう や 月の 入と ちう 蛙住

赤子 ちう 香す 柳 籠り 志 日 ちう 南 芥三

ちう 志と 柳も ちう ちう 塚の 前 未春

山吹やあけぬうらら〜いさぬ色

花巻

梅の花深う薫るや空に紅雲

凌雲

春風子ふくきく竹色清れり

春春

去年の冬旧里より〜を易々
歌をよみて送る時今年二月廿五日
古華の遠く帰る再遊〜を
重くゆ〜病中の苦味を心と痛く
牌前と顔〜の〜

ふゆの面影さ〜地橋可親

西

百日葦葉〜

友へのあき乃由はる〜眼をさる

呂豊

お解〜

ほ〜と春の志〜落詠多利

初如

お解〜

梅〜さゆ梅の青けり〜

サコ 丹星

清〜た〜咲〜あ〜交〜

笛斗

古池の氷解〜あ〜可南

酒一

新臺よりして通るぬまの橋 サカミ 権北

くわん 鶴通りの路もろくれく 権北

日ちききぬものともふれかろく 音好

あくと梅く免とやうき色 清寄

けくくく雪を泳ぐく 抱儀

風朝の霞の近化を

回つてく乃あく世を

おと路を

眼を閉を張くく サカミ 天某

くわん サカミ 白塔

老翁のおぼん才すくう
路のくくく世の消息
あひくく子の四十九日
くくく床とすくくく
情をくくく

父母とあくとくくく
おわきく世のくくく
くくくくくくく
くくくくくくく
くくくくくくく

麻はくくくく 権北

継母の道も来たりくく
くくくくくくく

園の松り雪おぼくく 氣條

そよや枯木の後も空野たゞ 蓮葉

竹のたけや雪ゆき森のうら 東川

うらむけの時白あけぬ松の香 元沙

葉おとちかきおとちかきや冬牡丹 花水

入月の影けりうらむる春 花山

花と走馬の跡に紅葉可角 素笠

をぬるも柳の葉と帰田も立 早菰

大穴と新まほろや枯柳 関山

手丈夫な橋もふゆけおとさう系 榊車

加さふと西のむらじぬ雪乃欠 南極

冬うれのうらむと見とる海の香 花路

多州や笠も襦もゆきと花 観世

藤の手の志うとあたる春の角 宣頂

冬は日やふゆと吹あむ松の香 蒼水

石路の雪かやうきうけえ竹葉 顧山

日月日ありも空の階とらる

槐花

取きつる影や——空のありき

萱花

儂のほほえみ——志を候

竹花

友とのあかりも嘆く婦日椿

上毛無名

有明乃空をくふく清なり

一多

枝の空あふらん幹は倒せり

如才

遠く老河をくまう

松と木とつらくをく——所翅椿

雷村

新暦月二十八日老河黄泉下
影をかくす也路ふと赤木と
永久のありきとわらさ一由と
指揮

おろしる松や上野のまの松

五丁 姫山

松又く日かきぬ色やうけり

素段

自然老翁病遠行——おひね
赤木とくのある松と静とつら

大層お松く日のおききなり可那

素段

冬山をくぬく水を映りうけ

おひね

帰極松の薄のやうありき

鳥之

有向水なき制りのあつ雪くもり 子吉 使川

月けふのあつぬきの便うぬ 松窩

あつ割を氷氷中や手向ぬ 梅村

師の身まを給ひしつゆけと
雪ふり雪ふりしつゆけと
あつぬきのあつぬきの

雪梅を咲かせる手向ぬ 千布留

自然を翁を悼む

積雪のあつけーあつ梅うぬ 茶山

月うぬ夜やあつぬきー雪の峰 幡雄

つゆ月も少も雪さきーあつ水 若水

老師去しあつ月未の八日過化しー
あつぬきを雪のあつぬきー
計音子録

あつ梅のあつぬきーあつ水 北洋

師のあつぬきを雪さきしつゆけと
あつぬきーあつぬきーあつぬき

あつぬきーあつぬきーあつぬき

つゆ月のあつぬきー霜の文 暢堂

あつぬきーあつぬきーあつぬき 常谷

あつぬきーあつぬきーあつぬき 夢草

春のぬけー 山おろさるるの雪 竹司

手向

霜月乃ーもかきと月也ー 春空

三玉里の海陸を履くゆめは
吊唁の事も心なまをさるるを
くむ

夜を日と兼ふ横の煙ー可角 イヨ 常居

老何身まゝぬを去来より
海鳥のりくをこい

あゝとを満ーまふのたろくふ 映門

とうとぬ手向せまやうを柳 景園

京都を春老翁筆去計言ハ
雲月二十一日とりのりくをこい

河佛よりや生るはなすまの如 虚白

赤木何思くして一世の春あつた

學解高直の去年の秋月味の

八日身海くを好むくをこい

文の伝くを好むくをこい

木の心や何なるをや 雲の花 イセ 荏叟

老師の筆ま手向をこい

あをるー眼も水くを江の霧 相一

奉哭風朗翁遠行

律之教又命二十一御仙名二十葛古

とて言ひや一 龍城の袖の雪 孟何

初日の路ちう一 ちう晴二十 三斧

操又を後ハ一 志ある一 俊可南 温惠

海一 さや平黄のち一 一後影 薩谷

必一 ちも魚一 けり一 ち一 操 銀岳

大内一 相雪折一 一集一 一と 白鳥

あふいで一 ち一 藤見や一 操の雪一 一十風兮

操一 の身乃一 ち一 操一 ち一 一と 晋我

あ一 ち一 口一 ち一 ち一 一と 仁里

か一 ち一 ち一 ち一 一と 老樗

因一 雨一 ち一 ち一 一と 和竹

奉哭の旨はあはれをさす
さうあはれをさす

世一 乃一 ち一 ち一 一と 心阿

珠一 ち一 ち一 一と 二粟

老翁毎夜月のみ来りて身まじり
あふくさきておほくちかたのやうに
覺えてそなたの徳をぬかぬ
宵の末に結ばしるも公さるる
カク 一止

室月未のハ月風朝露の芳華
あはれぬと宵くおほくちかたのやうに

聞 春 加 林 水 石
テハ 御 風

風 朝 露 せ ぬ ち ち

眼 不 下 身 一 心 岩 の 白 石
京 杜 若

老師の遺骸を天皇方のを
幕りてととふけあはれ

宵 々 走 消 入 ち ち 刺 新 衣 の 衣
イナハ 寸 風

於 温 泉 亭 百 首 管 返 福

自然堂居士

うき蝶の舞 走 ち ち 新 衣 紗 衣

余 々 走 ち ち 乃 袖 小 井 井 乃
園 二

村 村 乃 泣 泣 泣 泣 風 吹 吹 吹
呂 叟

婦 乃 葉 々 々 々 乃 階 々 々 々
近 流

山 梔 子 々 々 々 々 乃 四 乃 月 恒
酸 菴

新 々 志 々 々 々 乃 見 乃 乃 乃
永 久

手し〜と帝統の東一を引て行

台

針をよきめを伊豫産すく

柴

吉公の首尾乃能て〜

西

小舟のり踏平大雪

崔

海の先を〜所のり〜

乙

苞お〜して松前産を待

台

為〜と破き〜存の〜

久

瑞数〜〜死す外は他中

風

御ふ〜朝夕画ふ〜

二

藤犯〜身の色〜

万

是法乃明も〜

遊

赤中〜ち〜

豊

毎祭〜市乃〜

流

阪痛〜志〜

基

子信〜〜海もの〜

岸

四方〜〜月鏡の〜

久

鞘のり者おくの袋

台

草鞋のり砂拂ひ

雄

二と艘船着ふ糸乃繋ぎ

介

柄ふり

二

北うけ乃壁の着るも塗土

豊

煮きと牛のひそく根鹿

越

宵寒おとす靴もあき

弓

小砂利の青乃流る

流

江戸町の九月のちうき

之

打つ替へ沼漁り

台

誰か吸とやふか

雄

安き新乃仕

介

那、山小岩を流る

二

舟うり

寺

満尾

各稔香

聞二四夕 呂叟之夕 近流 三夕

後臺二夕 水久四夕 台く 四夕

紫遊之夕 西了 三夕 雀翁 二夕

乙雄之夕 風介 三夕

弘化丙午四月十日於天台境城陽貴山
鳳朗居士管追善

土佐國高知連

鳳朗居士

住ふもすこやあぬ小かん古亭

松のちり葉をうけた手のひら

袖先うゝ船の座唄り可なりき

去る花う海へり水海屋や

去歸くよ花紅日如の盡る月

嵐夕

葵家

習竹

婦牛

市陣一觸は清く露あり

飯命

奥縁の代よりと置けり

櫻介

後身乃紋：慈の肩より

化昇

不檀も飯やりの毒し小瓶に込

梨園

珠数と海怒望を舞ふ本行

古風

一長家行の家賃ともめ之望

月圓

折角節の河魚の鱗を

古松

古とまの刺しあひの雪の月影

市能

秋のまはりのゆめを露石

友石

四座の流と見え古風な羽織つを

南臺

照立とくし横小長を所あり

菫舟

西くを早うおぼせし後の景

遅流

庭掃きしを治勢酒と碑

成之

書を名うしに釣を乃帰さう刺

大亀

手とりぬ程結海うけ込

壺通

あつと知る笑はしと落すしやう

栗里

宵あ——寝く坪の赤い

琴石

把巻ううさうと入梅乃晴うう

柿陰

層禪ううと茶合世教

潭く

脇く——を刀取あふ二水出

帯鉈

情桑と勝とうう和月と巧ふ

菊五

飛脚屋も来ぬ五山の更利うう

蓮堂

芭蕉破く堀間乃月

雀唄

うの翁をとうううおろすあの中

自牛

あ——く冷る寝のゆき株

春人

菊箱もあふう見込乃あう茶抄

了俗

喧嘩あなのりと通う落

茶近

ぬうたう、鏡月のあを大倉居

鳥香

中と吉竹も踏ぬ雀子

佳水

作け唯遠き身を吹くふ乃危

莖崖

袖く——袖く——何く師方

執業
元史

自然堂老翁を筆善友の号
病のひやう少老翁乃て所を大
幅に書て布をひらき入らる筆
勢少くもたぬ心と能
志うては時お月のお光と酒
あひぬと逢俗の志とせしむる

かゝる筆と名へハるる 小筆表の字 習竹

晴月十九日七師七日の尚忌
かきハ花巻の水菫を筆す
心まうの香をを備へる

合ふもや善友白ひの涙うのあ 帰牛

七師送吟彷彿とて耳邊を離れ

あゝ新し後まかりぬ 采呼る	筆崖
片ひく風の行とある牡丹可那	飯幣
姉妹新子てめた女へあきさう	夢翠
渾くく浦浜志終る清きう南	古風
只病るり日暮りあろあ仕るうふ	逢堂
解たけをんて備る才河治う那	市橋
ふきうけを晴きう白や秋あふ	化昇
多も新し垣も縛るて合款の号	元史

河のくゞと猪乃組は白ひく角、大亀
 藤々橋を起しと越ふ野原の如、夏迹
 組を何れく一等出くゞ猪のつゑ、岩夕
 批判しと是くゞの道、毎程、雀浦
 ともくゞと松風陣を、かきくゞ、壺通
 手拭と抱くゞと純くゞ組を、素人
 河のくゞ日やつとくゞ偏如立、佳水
 着くゞ前々明跡を、若子くゞ、琴石

一軒 志くゞ植田の雨を又、栗里
 何れくゞくゞ組もくゞくゞ形、樹くゞ、南臺
 着くゞ名くゞさのあもくゞくゞ猪くゞ角、桑近
 おののまや蒼のめくゞ音も付、自牛
 帝あめを起て何れくゞくゞ、鳥身
 貴くゞや二の春くゞ人の再、帯朝
 控のあくゞ木も何れくゞくゞ橋、夢五
 果乃あき海をくゞくゞの意、梨園

飛石のぬれを及まじき苔のすゝめ

友石

納涼坐乃たし〜出〜〜〜〜〜

櫻介

師恩の深きころはも冥きかゝく
あふひ乃密〜〜〜〜〜
〜〜〜

梅り身の層く〜布ら〜被可角

チクコ 菱五

前書行し

喜翁の甲斐をさす神の宮く都

文老

呵ら鉄〜日のちん〜如相と梅

琴凌

さし夏の夢〜中〜運〜〜〜〜

園芝

木の中し木乃及〜〜〜〜の危

半畑

老翁の終焉を性月半
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜

未と〜〜〜たゆ〜〜〜川俣り

ヒミ 有西

け〜〜〜存〜〜〜ある〜〜〜乃〜〜〜魚が

シナヌ 葉碩

自然老の翁ら父乃解〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜

俣りのある者〜〜〜や雪乃梅

ナニハ 松謙

風の静寂の黄泉乃客と
ありてありしとあり

啼き声もささくそと聞かば
、 亦終

今昔も又つり内（靴仕の
糸を巻く）はれはまやも
蒼壯の威容を招き舞
ものをもたのしきも
おもひのかほこもちん
ゆりゆりハ

不似た成考とそ月も
、 怪々

師の黄泉乃客とそりありし
蓮葉もつり消息とありし
ゆりゆり

つりつりと眼ありそと
、 霞泉

河世に在るハ東方ニ百奈里
海陸を登るんとつりも
境界に接するなりありし
を新月に西方の客とあり
ありしとそり消息の魂
ありしとそり消息の魂
ありしとそり消息の魂

言の葉もつりありそと
、 左

香の空や中に加えてせしむ月

不可法 仙友

高師世を辨しあはし
うし西月庵より昔年ぬき給を
つし年遠産観の味は延年
縁をまきし法世より庵より
おしし教束をうけしもこ也
夏の中乃あはしうちうち

櫻の葉や折るまきも云々
法浄も又何れをせり 蓮如も 黛笠 縁天

老翁去年の冬に病に
懐知をたはしてまじゆや
雪まきうすす枝あはし

拉鳥作を織るまきも
命も命はあはし念る
おんの都よりあはしと書し

あはしおのちをまきし 香付まき 沙比
おのふとあはしし 名はや空のり 芳苗
修光の清れあはし ねうゆき 朱雪
お折やゆきとあはし 日おりまき 松丈
野の春乃大うとあはし 門の地 菖秀
池波乃ゆきあはし 氷うち 山月

陪下しそ置いと秋より五月晴

梅子

池也さや降るをえたる釣也

百條

吾れ掃て薪の刺場をゆるる

有司

月竟ハ幼やとあらんうと辰花

柳菴

魂柳や傍くぬきを巻かき

瑞逸

能立もふ出る初空際より

大春

此の巻の終ハ家許より
園のうらを去る中
今年霜降月の二十日

四葉をつ朝とては世城
去るのふとまをえりれハ海陸
二百里を登る途に道傍の
一章を盡すありける南中
桐樹渡風朗居士と名堂

作 念更

念更

悼 自持筆前文略

揚子志る空を也反古掃除

道源

弘化乙丙午三月二十日管追善

薩摩國鹿兒嶋連

鳳朗居士

森古松や庭根に如あつたまの雲

のちの鏡の影うす交際

子規葉のうらみ春に見送るて

折し中追き麦のそとく

馬廻

鉄冠

青靴

多流の扇かきしを立巻り

さくもくしをちりそとちり

節も日半る花ハ貸ゆい

ちりちり豆乃ちやい雇人

華梅の枝突乃ち字未すめり

身もも物もほきる振袖

月の満ち柳の葉のちりちり

深きめまふいと出代

利角

手糸

真玉

鼎水

白英

呂專

桐

冠

和尔登田うけをけりて角力好

北の海をこし一葉内の子

難節又はきり難小雲かゆり

重治の軍操之——後

まうこ櫓乃り先取晴うり

古今をまゆゆ手ゆりの雛

紅丸う渡りて帯有ふ海行ふ如

紙うをふり鶴乃り扶持

瓢

角

和

玉

水

英

專

洞

清丸を巻くうけとて揺り状

遠い後架り流る井極

雪燈ひ跡の老母子の困ひふき

櫛のとこもりを拭け眼と西

过石と流らうき流て神多り

あめきりけのさきぬ新田

朽果と櫛恒もとか月まで

隆元皇を泣かしく共々

冠

瓢

角

和

玉

水

英

專

巻むしーのいーやー啼く朝
瓢

やうちう水引の糸
冠

手のうちを志のうーやまい交あし
糸

下ーも華に兔育ー
角

世へのあう是利 花の河さやう
水

翔ーうーハ 紐をまーと 漣に費
玉

まーと 舞う ぬーさーの 雲さあ
堀

ふーと 物乃 葉とあう ちね
瓶

吾母月念の自好世の暮
身すーとぬとあまーと消息
のーまーとぬとあまーと消息
既をやうとまー

縁の世に代るをー 玉の雪
堀

茶の如京区身はうかと
あうと堀のまーと送る

踏ーと 表はをさーや 江戸のたお
鐵冠

まーと 手と 登うけー 汐うう那
青瓢

鳴ぬのも 頬はまーと 陸う家
利角

まーと ちる 繩の中 涼ー ちあま
亭玉

手あはるゝ是へ伸す物繩部、白英
錦帯や紅ひの垂る繩をくま、呂專
くろりけい藤と青あゝ紙あゝ紙、千和
海向て海走の古る所歌、昇水
跡立と筆傳はれ出まぬ難き、上毛 己明
妻のねやねよりけり、錦袴、琴堂
少しゆね、ゆゝ、小舟可南、栗山
飛船のあはれもあゝ、子、若、谷朗

昔子や啼ぬはをあゝ、たぐりた、雪在
又うゝと程の屋々や梅柳、天朗
長閑さや空の傾度乃宿をひ、結言
蒼くふい又王うゝや、まゆの水、心足
ぬねをくゝ方と紐子のあゝ、南、桃垣
立ぬるも取巻さゝる、離可那、一揚
秋のあゝむ木と鈴おくや妻の月、卧雲
あゝゝゝハ系を、あゝゝゝ、牡丹系、松蔭

板也ーこ小袖小虫の結さるる
 逸美
 物逢ひと月もろくろくちりぬる雨
 三村
 戸上をゆらぐけりぬる雨
 隅人
 大川のもぬるけりぬる雨
 涼斗
 鶴代や人ち所走のけりぬる雨
 可考
 妻多きと月もろくろくちりぬる雨
 竹崖
 三月月もぬるけりぬる雨
 蓬孫
 何れもぬるけりぬる雨
 月
 木布

空り共木下小虫のけりぬる雨
 利雲
 けりぬる雨
 涼水
 平の峰 立とてけりぬる雨
 言斗
 ちりぬる雨
 水崎子
 南
 草貫て年のけりぬる雨
 雲山
 夕の日の平けりぬる雨
 柳涯
 雨ちりぬる雨
 庭芝
 枝先と蒼けりぬる雨
 木槿り雨
 素塵

後立のひらき 櫻の影 蓬亭

心と足も花の引 ぬ芽の福 澄秋

晴る 帰や 雨の 井の 曾三

一志を 雨の 梅の 市橋

坂の 雲を 雲の 燕琴

柳の 雲を 雲の 大恒

さや 秋を 雲の 古高

候う 入る 月や 尾葉の 奥野

友木立 雲と 音の 海を 越彦

柳の 雲や 雲の 風と 梅迄

粒の 雲と 雲の 和の 柳屋

晴の 雲と 雲の 五月 鹿草

日影さ 雲の 雲の 朝の 曹村

十月 雲や 雲の 雨の 春湖

雲の 雲の 雲の 雲の 春年

晴る 雲と 雲の 雲の 晴風

及先一歩りて館のくはせたり、
 高嶽、
 高嶽、
 周五、
 清水、
 春成、
 磯島、
 荏村、
 樵魚、

提灯、如や、
 其僊、
 雪貞、
 二葉、
 藤丈、
 良和、
 其桃、
 清漪、

日並ちるに朝ふ夕暮や稲のこゑ

稲雲

かくらふをありてしうらむそふみ中
けちあもあふた君のいさむ

一想

田川花本宗通の君あふあを獲て

く川井くく限くくいさむもむのもの
あふうさうあふさふあふさむ

鶴峯成申

古人の部

あふ河子先くあふ門牙
くくのむくくを結ゆく
長善をいさむ

氣研の初とつりけくくくく

一番子

むうけを今やうめくく後瀬く角

竹魯

空秘く名をく海くくくく

富振

笠脱ハ村子帰くくく

石布

朝うやみ今 嘆て々々

菴心

胸のともとの間にかうや秋のこれ

六

生て居る標葉の五月晴

樹村

名なき松やわらわぬ席の空屏風

李仁女

厄落し 雑器さうさへ漏る

風盤

吹くまゝの風も方やうらな年の暮

藤文

長うれと身も志のさうや夜の生

宇橋

茶うしと告年ん雪の身痒し

實水

春の雪融るふと年々仕替る

サカ 一 櫻

海に手や顔や洗ふと花の中

エチヨ 其流

遠碁は霧のさめさめと雪のうら

三 文

かゝくくくくくくくくくくくくく

アハ 大管

春の音のやうに手強く吹えり

サカミ 菊社

板敷の赤やせき葉のうらねる

蓬室

此のうらねる葉のうらねる

三 枝

清のうらねる葉のうらねる

エチヨ 菴水

郭の義を以てしむる冬より那

房州 素共

岸中川 岸の義を以て他流

岸 岸

岸の中や巧くいふ好あり

今 愛

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

協起追悼之俳諧

肥前長壽

幸玉やまゝの終りも梅の志

鳳朗居士

そゝ里身もも朝乃常

伊 童

古の流るゝ海苔のしり漣ふて

子 江

あをのささ戸をの枝多利

童

可愛も魚の扱もつゝ存如加

江

夢目又へ偏て給君様す

童

同行三人舟中（あつ）

神と神と對木（う）新海日（か）竹有

民風狂言の文の傍
あつてお（う）

雨を新（う）穂花乃（か）笠 對竹

手付所存を（あ）り手（う）啼（う）やん 士朗

あつてお（う）のう（う）き（う）のこ（う）め
師（う）の（う）名（う）を（う）送（う）の（う）か
送（う）の（う）か（う）か（う）か（う）か（う）か
（う）か（う）か（う）か（う）か（う）か

あつてお（う）のう（う）き（う）のこ（う）め
師（う）の（う）名（う）を（う）送（う）の（う）か
送（う）の（う）か（う）か（う）か（う）か（う）か

